題名「不易」には、「時代を超えて優れたものに共通する本質的なもの」を大切にしたいという谷口澄夫初代理事長の思いが込められています。

相澤麻有子さんの取材を終えて

黒部麻子　フリーライター

相澤麻有子さんとは、かつて「聞き書き人の会」でご一緒したことがありました。その時にはもう、高橋さんへの聞き書きを終えられていたのですが、相澤さんの口から語られる、高橋さんへの強い思いと、麦稈真田という何やらマニアックな世界の話がとても印象的で、一度じっくり相澤さんのお話を伺いたいと思っていました。今回、念願かなって、その好機を得たことを、ありがたく思います。

相澤さんは移住当初は、笠岡市がかつて、大好きな麦わら帽子の一大産地であったこととは結びついていなかったそうです。でも、近所のおじいちゃん・おばあちゃんから話を聞くうちに、麦稈真田と地域の歴史を知り、編み方を教わりながら、農家さんからもらった麦わらで帽子を作っていく。編み方がわからないものは、お年寄りの中に入っていって、わかる人を探す。相澤さんが子どもの頃からあたためていたものが、時を超え、地域も超えて、偶然とも必然ともいえる形でつながり、実現されていく。その様は、お話を伺っている私も、とてもわくわくするものでした。（詳細はHP「財団と人」掲載予定）

そして、そうした活動の周囲には、それを支えたりつなげたりしてくれる、たくさんの人との出会いがあったこと。私も関東からの移住者です。「わかる、わかる」と、何度も心の中で頷きました。また、福武教育文化振興財団の存在の大きさも改めて感じました。助成は、やりたいことを形にするための後押しをするだけでなく、新たな人とのつながりを生み出す契機にもなっているんですね。

今回の取材はインタビューだけでなく、石田製帽さんの工場見学もさせてもらえる、とても贅沢な機会でした。今では製造されていない古いミシンを、メンテナンスしながら使われています。そのミシンにしか出せないストレッチの良さがあり、かぶり心地の良い帽子に仕上がるのだそうです。各工程で発揮される職人さんたちの技を、間近で見ることができました。

麦わら帽子は、紫外線カット率も天然素材の中ではいちばん高く、使い込むほど日に焼けて、いい風合いになっていくそうです。大事に使えば耐久性も高い。相澤さんのコレクションの中には、100年もののカンカン帽もあり、さすがに今は使えないけれど、しっかり形として残っていました。こうした地域の貴重な産業を、一消費者としても大事にしていきたいです。

KUROBE Asako
1981年東京都生まれ。大学卒業後、出版社に勤務。2012年に岡山県に移住してフリーランスに。

「この帽子」を描く

タケシマ レイコ
デザイナー／イラストレーター

物づくりの現場を訪ねて、作り手の思いや制作秘話を、その場の空気の中でお聞きするのはとても楽しい時間です。お話を聞いた後では、今まで何度も見たことがある物であっても、全く違って見えてくるような気がします。

『FUEKI』のお仕事では、表紙絵を描くために、取材に同行させていただく機会が何度かありました。取材先は、郷土料理の作り手、家具メーカー、福祉施設など、普段の生活ではなかなか接点を持つ機会がない分野の方ばかりで、固定観念を覆され、視野が広がるきっかけにもなっています。

実際に足を運んで見聞きしたことから得た経験は、どれも私のかけがえない財産となり、絵にはその感動が色濃く反映されていきました。もし取材に同行していなければ、別の絵になっていたことでしょう。

今回の表紙絵の題材は相澤麻有子さんが制作したカンカン帽。取材には同行していないものの、相澤さんにカンカン帽のお話を聞くため、私は笠岡を2度訪ねていました。カンカン帽が表紙絵の題材になると知る前のことです。

最初の訪問では、麦稈真田とカンカン帽、また笠岡の麦わら帽子の歴史について、たっぷりとお話を伺い、2度目の訪問では、相澤さんがお勤めの石田製帽さんで工場見学をさせていただきました。

カンカン帽を作るためにはまず、麦を収穫することから始めるのだそうです。収穫した麦はしばらく乾燥した後、一本一本手作業で加工され、やっと帽子の材料ができあがります。1つのカンカン帽ができるまでに、途方もない手間暇がかかるのですが、相澤さんはそのお話を、実に楽しそうにされます。

工場で拝見した、決して機械では真似できない熟練の職人技は、魔法のようでした。そして、相澤さんをはじめ、全国各地からやってきた若い職人さんと共に、ベテラン職人の80代の女性が生き生きと働いている姿も、とても印象に残っています。

さて、そんな充実の笠岡訪問から程なく、私は表紙絵用のカンカン帽の撮影のため、財団のオフィスを訪れました。気持ちよく晴れた日差しの下、撮影は屋外で。職員の方たちとの何気ない会話は、平和な空気を醸し出し、帽子は穏やかな陽光を浴びて、一層キラキラと輝いて見えました。

笠岡での時間、工場の空気、財団の光、そうしたものを思い出しながら、私は「帽子」ではなく、多くのストーリーを纏った「この帽子」を、一心に描きました。

TAKESHIMA Reiko
女子美術大学芸術学部芸術学科卒、エディトリアルデザイナー羽良多平吉に師事後、独立。イラストを生かしたデザインを多く手掛ける。2016年から『FUEKI』のデザインとイラストを担当。倉敷市立短期大学非常勤講師。

Editor's Column

■400名が集う成果報告会は助成団体が一年間の活動を振り返って発表する場だ。その後の交流会は毎年いつも大盛況で、助成活動をする個人・団体の新しいつながりが生まれる機会になっている。巻頭の相澤麻有子さんは、昨年ポスターセッションをしてもらい、今回のfueki合併号の記事につながった。財団の助成金が縁となって、様々な方がつながり、地域の活力となっているのは本当にうれしい。■ところが残念ながら、コロナにより今年の成果報告会、交流会は中止せざるを得ない。ならば代替の機会をつくろうと、オンライン形式で様々な取り組みを行っている。地域ごとに助成団体の近況や活動の悩みなどを共有するand F情報交換会、ポスター発表形式でand F成果報告会。画面ごしではあるが、リアルタイムで顔が見えて話ができる。小規模ながら複数回実施することで、かえって従来では聞けなかった情報を得たり、参加者相互間の新たな交流も生まれる機会となっている。■来年度の公募助成募集が始まった。いつまで活動が制約されるのか不透明だが、従来にはない新しい挑戦を応援していきたい。（O）

2021年度教育文化活動助成公募のお知らせ
受付期間 ： 2020年11月15日～ 2021年1月15日（必着）
教育と文化の持つ力によって岡山県が豊かで充実した社会になる。そのためのチャレンジ「やってみる」を応援します！ 詳しくは、公式WEBサイトをご覧ください。

FUEKI vol.72+73特別号
COVID-19新型コロナウィルス感染拡大の影響を受け、5月に発刊する予定だった72号を73号との合併特別号としてタブロイド版で発刊します。

人づくり、地域づくりを応援します
公益財団法人 福武教育文化振興財団
FUKUTAKE EDUCATION AND CULTURE FOUNDATION
〒700-0806　岡山市北区広瀬町1番5号
株式会社ベネッセコーポレーション広瀬町社屋
TEL：086-221-5254　FAX：086-232-3190
URL：http://www.fukutake.or.jp/ec/
E-MAIL：eczaidan@fukutake.or.jp

機関誌 不易 FUEKI vol.72+73 2020.10.25
編集・発行：公益財団法人 福武教育文化振興財団
制作：株式会社 吉備人
デザイン・イラスト：タケシマ レイコ
印刷：研精堂印刷株式会社

10/25 Sun. 2020
FUEKI vol. 72+73

大好きなカンカン帽が織りなす人と人

相澤麻有子さん／帽子職人

麦稈真田との出会い

相澤さんが笠岡市に移住してきたのは2016年のこと。「海の近くの古民家に住みたい」という夢をもっていた相澤さんは、家具職人の知人からの紹介で、笠岡市内に古民家を見つけ、地域おこし協力隊として活動をスタートしました。

幼少期から麦わら帽子、中でもカンカン帽が大好きで、夏場にはいつもかぶっているという相澤さん。そんな相澤さんを見た近所の人たちから、笠岡市がかつて麦稈真田（ばっかんさなだ）の一大産地だったことを聞きます。

麦稈真田とは、麦わらを真田紐のように組紐状に編んだもの。麦わら帽子は主に、それをぐるぐる巻くようにしてミシンで縫って作られます。麦稈真田は、戦前までは政府奨励の重要輸出品で、中四国地方では農家の副業・内職として、多くの人が編んでいたそうです。

「移住して半年ほど経った頃、近所に住む高橋寛（ゆたか）さんを紹介してもらいました。当時90歳くらいで、昔、帽子屋さんをしていたそうです。自宅にミシン1台だけ残して、時々麦わら帽子を作っては近所の人たちにプレゼントしているというおじいちゃんでした」

相澤さんは、麦稈真田の編み方や歴史を教えてもらうために、高橋さんのもとへ通うようになります。ところがおよそ1年後に高橋さんの体調が悪化し、がんであることを知ります。

そんな時、相澤さんに高橋さんへの「聞き書き」を勧めたのが、NPO法人倉敷町家トラスト代表理事の中村泰典さんでした。中村さんから「聞き書き人の会」の山川隆之さん（吉備人出版代表）を紹介され、相澤さんは急遽、高橋さんへの聞き書きを行います。

「高橋さんの体調はどんどん悪化し、話せる時間が短くなっていましたが、なんとか1度だけ、約2時間、お話を聞くことができました。文字起こししてまとめ、読み上げて高橋さんに確認してもらいました。それを製本したものと、私の作ったカンカン帽を手渡すことができたのが、2017年の暮れのことでした」

高橋さんが亡くなったのは、翌年3月のはじめでした。

助成金で麦稈真田の冊子を制作

相澤さんは協力隊最後の仕事として、2019年に「麦稈真田のすゝめ」という冊子を制作しました。歴史、制作工程、道具、組み方などがコンパクトにまとまった冊子で、県内の図書館などにも置かれています。福武教育文化振興財団の助成金を申請して、印刷費に充てました。

「それまでワークショップをする時には、プリント1枚に歴史や編み方を載せていたのですが、手元に置いて何度も見返してもらえるものを残したかったんです。助成金をもらえたことで、背中を押してもらえたし、一歩踏み出すきっかけになりました」

助成金のことはそれまで知らなかったという相澤さん。紹介してくれたのは、笠岡市内で活動する「旬の会」代表の田中恵子さんでした。そして、そこからまた、麦稈真田の縁は広がっていきます。

「田中さんのお子さん、希莉子ちゃんがワークショップによく来てくれていたのですが、麦稈真田のことを新聞形式に上手にまとめてくれて、それが山陽新聞社の第8回（2018年度）『おかやま新聞コンクール』新聞づくりの部で岡山市長賞を受賞。希莉子ちゃんは麦稈真田を編むのもとても上手で、今年の夏に公民館講座で講師を務めたと聞きました」

協力隊を卒業した相澤さんは、笠岡市の老舗メーカー・石田製帽に就職。高橋さんが使っていたのと同じ、古い「環縫（わぬ）いミシン」を使って、今日も帽子を作っています。（取材文 黒部麻子）

AIZAWA Mayuko
長野県出身。中学の頃カンカン帽が欲しくて市販の帽子を解体したことで麦わら帽に興味を持つ。2016年に笠岡市地域おこし協力隊に着任し麦稈真田の掘り起こし活動後、同市の帽子会社に就職。現在も麦稈真田の調査と魅力を伝える活動をしている。

フォーラム 「ここに生きる、ここで創る」

藻谷浩介さんを迎え、あふれる地域の魅力を語り合う！

公益財団法人福武教育文化振興財団では、3月29日に予定していた「福武教育文化振興財団フォーラム　ここに生きる　ここで創るvol.9」は、COVID-19新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐ観点からZoomによるオンライン形式で7月25日に開催しました。

第9回は、「地域資源の地消地産を文化に」をテーマに、日本全国のあらゆる町を歩いてきた地域エコノミスト藻谷浩介氏をゲストに迎え基調講演を、その後、岡山の地域資源を活用し地域活性化に取り組む青山雅史氏（引両紋 代表取締役）、川崎好美氏（岡山県立倉敷商業高等学校 教諭）、和田優輝氏（和田デザイン事務所 代表取締役）の3氏と「岡山にできて東京にできないこと」について語り合っていただきました。

平成合併前の3200市町村のすべて、また世界各地を訪問し、地域の特性を多面的にみてきた地域エコノミスト藻谷浩介氏の基調講演は『交流を定住につなげる地消地産』というテーマでした。

まずは"コロナの時代に交流して大丈夫なのか？"と世界、日本の感染状況をデータを交えての説明後、「専門家の意見を待つのでなく、目の前で起きていることを知り、判断し、行動することが重要です」と言われました。

次に"定住人口に何が起きているか？"では県北に位置する真庭市の人口データを例にあげて、田舎と大都市の高齢化大逆転のお話。

最後は"定住人口を増やす地消地産とは何なのか？"。藻谷氏は「地域と地域企業が今後とも続いていくための道は「地消地産」。地元で消費するものは極力地元産にして、売上の中で、地元に残って回る部分を1％でも増やす。地域内経済循環を拡大し、決裁権限を取り戻そう」と熱く語られました。

フォーラムの内容は、グラフィックレコーディングでご紹介します。

基調講演の動画はこちらからご覧になれます

藻谷浩介氏による基調講演　テーマ「交流を定住につなげる地消地産」

活動紹介の動画は
こちらからご覧になれます

今ある環境を活かすことに全力をつくす

青山雅史　引両紋代表取締役

今までどこかの地域と僕たちの地域（環境）の比較をしたことがなかったですが（比較してもしょうがないが正しいかもしれません）、改めて考える良い機会になりました。全国からたくさんの人が集まっている東京などの大都市で「地消地産」は難しいように感じました。ただ、だから地方が良いとか、東京が良いとかは難しいとも同時に思いました。渡辺和子さんの本のタイトルに「置かれた場所で咲きなさい」があります。どこかの地域の成功事例を聞いて比較することも大切だと思いますが、今ある環境を活かすことに全力で考えた取り組みこそが、その土地でしかできないことになっていくと思いました。初めてのZOOMでの講演だったので、参加していただいている方の反応が見えなかったのが不安でしたが、講演中にたくさんの方からご質問をいただいたこと、講演終了後に感想をメッセージでいただけこと、非常に嬉しく励みになりました。

AOYAMA Masashi
1987年岡山県備前市生まれ。大手紳士服会社の販売員を経て、2010年に起業し、備前市 吉永町に「茶房 引両紋」を開店。岡山県産のお茶を使用したペットボトル飲料の「瀬戸内茶」を販売し日経トレンディの2017年のヒット商品にも選ばれる。近年では、病院とお茶を組み合わせた新しい地産地消の取り組みが注目を集めている。岡山県産のお茶が岡山県内で消費される文化を目指して活動している。

時代の圧力や不便から生まれる力

川崎好美　倉敷商業高等学校教諭

あらゆることを立ち止まって考える機会なったコロナ禍。ステイホームに臨時休校。在宅勤務。これまで肯定されていた前進アクセルに、突然ブレーキを掛けられて、方向転換、違和感の日々でした。藻谷氏とのトークセッションは、臨時休校も1か月前のこととなり、日常の歯車が元通り動き始めた7月末。「元の通勤に戻る人が2割、嫌だと思いつつ戻るのが6割、別の道を検討するのが2割。実際に動くのは2％くらいか。世の中、そう簡単に変わらない。その2％を受け入れる地域と企業がチャンス。」というお話が心に残っています。時代の圧力や不便から知恵や力が蓄えられ、様々なものを産み出していると思います。藻谷氏の「地域眼」には岡山の未来を占うだろうお話がたくさんありました。

KAWASAKI Yoshimi
1977年津山市生まれ。倉敷市児島在住。津山商業高校卒業後、岡山商科大学に進学。「高校生による日本遺産魅力発信事業」により倉敷市日本遺産推進室と連携し、繊維産業を発信するものづくりワークショップ「Cotton　Terrace」を展開。また、より深く地域課題を捉えることができるRESAS(地域経済分析システム)を活用した地域学習の授業づくりを進め、社会教育として、2018年、「RESAS☆温羅カフェ」を設立。内閣府RESAS専門委員。

地域に生きる僕らに自由と可能性を

和田優輝　和田デザイン事務所代表取締役

「オンラインという新しいコミュニケーションの形が、地域に生きる僕らをますます自由で可能性に溢れたものにしてくれた」と感じさせてくれたフォーラムとなりました。フォーラムでは、これからの時代の豊かな生き方に関して、地域に根差した建築を通じて探求していることをご紹介させていただきました。探求している道は、先例があるわけでないので模索も多い中、藻谷さんの視点や青山さんや川崎先生の実践例にも多くの刺激をいただきました。また終了後、ニュージーランドから参加していた福武總一郎さんからもコメントをいただけたことは勇気づけられる出来事となりました。貴重な機会をいただきありがとうございました。新しい時代への兆しを胸に、これからも、地域に根差しているからこそ見える気候風土・景観・歴史・暮らし方など沢山の資源を、建築デザインを通し、多くの方とその魅力を共有できるようにしていきたいと思います。

WADA Yuki
1978年東京生まれ。早稲田大学大学院修了。2008年妻の故郷の岡山県津山市に1ターン。2013年（株）和田デザイン事務所設立。総務省地域力創造アドバイザー。建築家として建築物＝「もの」のデザインに先立ち、企画段階からプロジェクトに参画し、建物の使い方、つくり方、コミュニティづくりといった「こと」のデザインを行う。建築やデザインを教育、産業、医療・福祉と様々な側面に重ね合わせ、地域の新しい可能性を引き出し続けている。

青山雅史氏、川崎好美氏、和田優輝氏の活動紹介

文化・芸術を近づける仕掛けが重要

「地消地産」という言葉がすっと体の中に入ってきました。地域で普段使うものを地域でつくる、消費者（利用者）の側の意識ももちろんですが、それよりも経営者・作り手の意識の変化が重要であると思いました。如何に地域の人に使ってもらえるように価格をあわせたり、品質を整えたりの努力ができるか。文化芸術も特別な日常としてのものでなく、地域の文化芸術が日常の中にどうやってふれてもらう仕掛けをつくることができるかが重要だと思いました。消費者としても同じなら地域のものを使うということを心がけたいと思いますが、何より経営者として事業者として日常に使ってもらう、ふれてもらう仕掛けづくりをしていきたいと思います。

石田篤史　ISHIDA Atsushi
土木技術者／公益財団法人みんなでつくる財団おかやま専務理事

地域の良さを同世代に発信

フォーラムを通して学べたことは、外から見た岡山の強みと弱みです。私は生まれも育ちも岡山で、まちづくりに興味があったり、地元が好きだったり、岡山については周りの同世代より知っているつもりでした。しかし県外に出たことがないため、外からの岡山の見え方が分かりません。そして、逆に県外から来た友達から言われて気づく岡山の良さがあります。岡山の文化が観光化していて、外部から人は来ているけれど、地元の人はそれを知らないという事実。そして県民が文化を知れる、語れる仕組みがないこと。岡山県内だけでとどまってしまうとそれが当たり前で気づけないことも多いけれど、一回出た時に岡山って良いなと思える瞬間こそ、岡山について知れる、語れる機会になるのではないかと思いました。微力ではありますが、私自身が岡山を知り、同世代に発信することで岡山の良さをたくさん知る若者を増やしていきたいです。

河原菜摘　KAWAHARA Natsumi　岡山大学3回生

トークセッション「岡山にできて東京にできないこと」

参加者の感想

瀬戸内茶を飲んで地消地産を実践します。RESASを使いこなしたい!

私は京都在住ですが、岡山出身で将来的にはUターンしたいと考えています。岡山の資源を活かして働きたいので、先輩方の活動にたいへん関心があります。

藻谷先生の、問題をスパッと切り込む説明が、分かりやすく。もやもやとしていた頭の整理ができました。特にコロナのとらえかた。もちろん、岡山にしかできないことの説明も、しっかり認識できました。また、相手の言うことをよく聞き込んで的確にこたえる姿勢。見習いたいと思います。

藻谷さんのデータの見方、大変参考になりました。倉敷商業高校の取り組みも感心しました。心強いです。

このフォーラムで気づいたのですが、地方の文化を発展させることは、いま課題の東京一極集中の解決になるのでは、ということです。

マーケティングを身につけた若者の育成に大いに期待しています。

地域に寄り添った取り組みやご提案だったので、東京にできないことは、上からではなく、寄り添う地域連携、共に歩む地域連携だと思います。

藻谷さんの見解が、目から鱗的で、様々な方向からの考慮を示唆していただけました。

それぞれの登壇者の方の取り組みに共感と納得をしました。周囲の人たちへ広めていきたいと思います。ありがとうございました。

研究をしている方、実際に岡山で活動・事業をされている方、両方の視点から岡山や他の都道府県を見ることができ、とても興味深く楽しく視聴させていただきました。藻谷さんのお話の中であった、人口増加の内訳については、いかに上辺だけの情報で踊らされていたのかを痛感しました。外を見て内を知る視点を常に持ち、自分に(もしくは岡山に)何ができるのかを考えていきたいと思います。

グラフィックレコーディングでできること

北浦菜緒
カンコーマナボネクト(株)所属／教育コーディネーター

みなさんは、「グラフィックレコーディング」「グラレコ」という言葉を聞いたことや見たことはありますか。グラフィックレコーディング(以下、グラレコ)とは「人々の議論/対話を 図や文字や絵を組み合わせたグラフィックを用いてリアルタイムで可視化する手法のこと」。期待される効果としては「会議の最中で、対話の活性化を引き起こす」「会議後に、第三者(身近な関係者)を巻き込む記録物になる」などがあげられます。(尊敬するグラフィックレコーダー清水 淳子さんの「Graphic Recorder ―議論を可視化するグラフィックレコーディングの教科書(2017)」より引用・編集)。

ここで白状します、今回の描いたグラフィックはリアルではありません。後日熟考型の「発展途上のグラフィックレコーディング」。もしくは、ingではない、「グラフィックレコード」です。といって、これがそうかそうでないかの問いかけではなく、「あ、もしかして自分のメモもグラフィックレコーディング／レコードかも」「どう描いたら会議や研修で役に立つのかな」という問いにつながればうれしく思います。

グラレコとの出会いは、昨年の春、勉強会でグラレコを目の当たりにした同僚からの「みてみて！なにこれ！やったら！？」という一言でした。清水さんの書籍を読みながら、講演をリアルで1枚のノートにまとめるレベルからはじめ、教育コーディネーターという仕事柄、教員や教育委員会、幼児・児童・生徒と関わる中で、授業やワークショップで実践を積み重ねながら、現在に至ります。いまでは、教育や育成・まちづくりに関する会議やオンラインフォーラムでのまとめや、高校での授業「総合的な探究の時間」の学習ツールとしての活用など、県内外の方々に伴走させていただいております。

誰でもすぐできるので、日常の対話や会議等の場でトライすることができます。コツは「俯瞰すること」です。全体のゴールや流れやそれに向けた発言や考えの重なりなどを常に俯瞰していると、ゴールに対しての議論が可視化されます。

今回のフォーラムでは、描きながら自分自身、多く気づきや問いを得る機会となりました。個人的なたまらないポイントは、それぞれの方が、自分なりに事実をデータや自分の身体の実感で捉え、それに問いを持ち、いまの地やひととの生活で実践され、それそのものをおもしろがり続けているというお姿でした。岡山にはおもしろがる大人によく出会います。というよりも、自然と巻き込まれる地です。県外出身のわたしが巻き込まれる不思議な地です。教育や文化においても、「おもしろがる大人」は重要な役割を担ってきたのではないか。自分も出会ってきたけれど、自分はどうだ。子どもはどうだ。と問い直す機会となりました。今回のフォーラムの様子をグラレコでご覧いただき、ほわっと言葉や考えが浮かぶ一助になれたらうれしく思います。

KITAURA Nao
被服学を学び、環境問題解決を動機に音公学生服㈱に入社。マーケティング・広報戦略・学校魅力化等を経て、現職。県内外の教育関係者や企業人との学び場づくりや魅力化に携わる。2019年より、岡山県井原市ひとづくりアドバイザーを務める。

あした、あさって、その先のための不易と流行

不易流行――当財団初代理事長谷口澄夫先生が、大切にしていた言葉（信条）のひとつです。財団の機関誌を発行するにあたり「**不易の本質は時代を超えて優れたものに共通する本質的なものであり、一方、時代的、社会的な進展・変化に賢明に対応して一新・変化の実を挙げるのが流行でありましょう。**」と機関誌の題名を「不易」とした理由を創刊号のごあいさつで語っています。教育と文化のもつ力によって人づくり・地域づくりに取り組む当財団は、この不易と流行の理念を援用して事業を進めています。「新型コロナウイルス」との共存が始まり、先がみえない不安な日々が世界で続いている今だからこそ、**その先の時代を生きるための〈不易流行〉をみつけませんか。** 撮影：才士真司

生きるヒントをもらった祖父大原總一郎の蔵書（語らい座 大原本部 ブックカフェ）

活動の原点は、里山で過ごした２年間（美作市梶並）

時代の翻訳力

大原あかね

「なんて頼もしいのだろう」

若い人たちを見ていて、感心することが増えました。次世代の心躍るアイディアや軽やかな行動力に喜びと小さな嫉妬を覚えます。COVID-19パンデミックにより、時代が１０年は進むだろうと言われている現代、次世代が創る未来にワクワクするとともに、私が次の世代のために何ができるのだろうかと考えます。

その時に心に浮かぶ言葉が「不易流行」です。

私の祖父大原總一郎は高梁川流域連盟趣意書の中にこのように書いています。

「我々は現在に生きているとはいえ、決して現代のみに生きているのではない。過去の歴史と未来の希望の接触点としての現代のみが、本当に生きた現実の日々の営みを与える」

過去からの時間の流れは未来につながります。その接触点である現代をどのように生きるかで時間の流れる方向が決まっていくとしたら、私たちの生き方そのものが未来への責任ともいえるでしょう。そして、大切なのはどのように生きるかのヒントを先人たちが大切にしてきた様々な思いや様々な事柄からあぶり出し現在に活かしていくことで、これこそ「不易流行」であり、私は、そのために必要なことの一つが「時代を翻訳すること」ではないかと思っています。

50年前、100年前と現代では、私たちの暮らしや生活は当然のこと、社会情勢、国際情勢も全く違います。ですから、その時代の人たちがなしてきたことをそのまま現代に実行しても、それは的外れであり時代遅れになるでしょう。その本質（不易）を言語化することが必要で、そのためのスキルが「時代の翻訳力」ではないかと考えます。

私が理事長を務める、大原美術館は90年前に岡山県倉敷市に開館いたしました。コレクションの礎となっているのは画家児島虎次郎が画業の勉強のためヨーロッパに留学した時に、モネやマティスから直接購入した絵画でした。このことを私たちは「同時代の作家とともに」と翻訳し、現在も同時代の作家の方々と様々な活動をともにしています。例えば、児島虎次郎のアトリエでの滞在制作（ARKO）などは、様々な場所で行われているアーティスト・イン・レジデンスです。そういう意味では「流行」ですが、常に同時代の作家とともに歩むという観点から言えば「不易」でもあるのです。ほかにも、大原美術館の活動は、「流行」のように見えるものもあるかもしれませんが、先人たちの言葉に耳を傾け、それを現代に翻訳している「不易」の思想が根底に流れています。

このような「翻訳」を丁寧に進めることが、きっとこれからの時代を切り拓く次世代のヒントになるのではないか、私は最近そのように思っています。若い世代より少し過去を知っている者の務めとして、先人たちの言葉を翻訳しながら、過去の歴史と次世代の未来をつなぎ、これから切り拓く未来が希望に満ちているということを伝えたい、そのように思っています。

未来が見えないように感じられる現代ですが、実は、未来が見えていた時代なんて、一瞬たりとてなかったと思います。だから、時代を切り拓く人たちには、必要以上に不安になることなく、自信を持って進んで行ってほしいと思います。そして、私は年長者として次世代に責任を押し付けることはせず、自分の世代のやるべきことをやりながら、若者たちにエールを送り、切り拓かれる未来にワクワクしたいと思っています。

OHARA Akane　公益財団法人大原美術館理事長
1967年9月生まれ。倉敷市在住。一橋大学経済学部卒業。青山学院大学大学院国際政治経済学研究科修了。金融機関系研究所に約３年半勤務。2000年大原美術館理事、11年同専務理事として館の運営に携わる。16年７月、５代目の理事長に就任。現在、財団代表として法人の経営にあたる傍ら、（公財）有隣会代表理事、（社福）若竹の園理事長、（公財）倉敷民藝館理事、（公財）倉敷考古館理事、（公財）大原記念倉敷中央医療機構評議員、（一社）岡山経済同友会理事、倉敷市教育委員などを兼務。

物語を描くのは…

藤井裕也

９月のある日、10年以上東京で働いているはずの同級生からラインメッセージが入った。

「実は、岡山に帰ってきとるよ」

理由を聞いてみるとコロナウイルスの影響で東京の会社に勤めたまま岡山に戻ってきて在宅ワーク（テレワーク）をしているとのことだった。

コロナウイルスの影響を受けて、地方への移住をとりまく状況は変わった。テレワークの普及、オフィスの移転や、地域おこし協力隊への応募数も増加。ノマド的な働き方をするフリーランサーはこれまでもいたが、会社勤めのサラリーマンでも、ネット環境さえあれば、都市だろうと地方だろうと場所を選ばず仕事ができる人たちが出てきた。

これらの動きを受けて、低密度でコストの安い地方は、都市からの評価が上がりつつある。地方移住の関心度も高まり、コロナ禍における世の中の動きを受けて地方の再評価がすすんでいる。

一方で、自治体や地域は、移住政策に熱が入り、自分たちが本来持っている価値に目をくれず、「コロナのおかげで地方の時代がやってきた」と浮かれ（世情やメディアに流され）ているのではないかという見方もできなくはない。元々地域にある人材やネットワーク、地域資源を活用した暮らしや文化を磨くことが、地域の価値を最大化するために必要なことであって、コロナ禍の世の中の流れに便乗したからといって地域がより良くなるわけではない。

コロナ以前も、コロナと共存していく現在も、より良く変わっていくためには、地域の価値を最大化する取り組みが根本的に必要だ。

自治体や地域団体のまちづくりに関わる中で、「田舎は資源の宝庫」「地方には都市にはない価値が沢山ある」そういう言葉をたくさん聞いてきた。しかし、その価値を十分に発揮し、地域の暮らしや文化までアップデートできているところは少ない。なぜか。

地域の資源を活かすための「自治力」の低下と、人口減少と過疎高齢化により地域が前に進んでいくための「物語」を失ったからだ。補助金のバラマキから公金依存行政依存の体質ができあがり、地域の自主性や自立性が失われた。国の政策や、都市発信のメディアの情報に流され、地域がもっている歴史や文化、地域特性に基づいた政策ではなく、短期目線の場当たり的な政策をしてきたからであるし、地方が、人口減少と過疎化による衰退の物語の主人公になってしまっているからだ、と思う。

都市と地方、行政と地域、コロナと現代、現在と未来、不易と流行。コロナ禍をうけて、私たちはどんな物語を描いていくのだろうか。

人はいつの時代も、異なる事象と事象に新たな関係性や意味を見出し、物語をつくり、歴史をつくってきた。この人が昔からもっている創造的な力は普遍的なものだ。このコロナ禍で問われているのは、我々の創造力ではないか。創造力を発揮して、地域に真の自治を実現し、地域の価値を最大化することで世界に誇れるマチを岡山からつくれないか。

エネルギーや食糧を地域回帰させ、多様な働き方を実現し、教育を再定義する。経済を地域内循環させ、暮らしをベースにした文化を再構築する、など取り組まなければならないテーマはいくらでもある。

変化を求められている今だからこそ、地域にあるものを磨き上げ、未来を創造しようとする皆さんと新しい物語をはじめていけたらと思う。

FUJII Hiroya
一般社団法人岡山県地域おこし協力隊ネットワーク代表理事
2011年美作市で地域おこし協力隊として活動。任期後に若者自立支援を行う（特非）山村エンタープライズ設立代表。（一社）岡山県地域おこし協力隊ネットワーク設立代表、総務省地域おこし協力隊サポートデスク専門相談員。

教えて！山田さん

10・11月の秋が助成金申請のシーズンとなります。
助成申請のためには公募の前からしっかり準備を始めたいものです。
よく聞かれるみなさんの質問に「助成金セミナーといえば、山田さん！」
と言われている山田泰久さんに回答していただきました。

Q　助成金って何ですか？

助成金はみなさんの団体を助けてくれるお金ではありません。団体を通じて、何かにチャレンジしている人や困難を抱えている方、そして地域や社会に役立ててもらうためのお金です。そういった視点で助成金を活用してくれる団体を助成財団は求めています。

Q　よい団体とは、どんな団体ですか？

よい団体はよい活動とよい情報発信をしている団体です。どんなに素晴らしい活動をしていても、その活動を必要としている人に情報が届かないと意味がありません。よい活動を行うために創意工夫をするようによい情報発信も心掛けていきましょう。

Q　助成金はいつ活用すべきですか？

必要と思った時に助成金を活用するというのも一つの答えです。さらに、上の活用方法としては、5年間程度の期間の中で、どのタイミングでどの助成プログラムに応募するのか、助成金活用の中期計画を作成することをお薦めします。

Q　助成申請をするうえで、いちばん大事なことは何ですか？

その事業が、地域や受益者、みなさんの団体のために本当に必要なものなのかを団体内でしっかり議論することが大事です。議論した上で、必要な取り組みだと思ったら、地域や人々のためにしっかり助成金申請書を考えていきましょう。

Q　不採択の理由を聞きたいが教えてくれない。

助成財団によって、審査結果の理由を教えてくれるところと、教えてくれないところがあります。不採択になった場合は、一度助成財団に問い合わせをしてみてください。もし、みなさんの団体が採択になった場合は必ず採択の理由を聞いてみましょう。みなさんが知らない、自団体の強み弱みを教えてもらえるチャンスです。

Q　助成金で得られるものって、資金の他にありますか？

様々なものが得られます。助成事業を通じて、ノウハウが蓄積されます。ネットワークの広がりや人材育成も大事なポイントです。また、よい成果を出せばみなさんの団体の実績にもなりますし、信頼度も上がります。助成金では、そういった資産をいかに蓄積していくかも大事なポイントです。

Q　地方の助成財団の期待することは何ですか？

地域の目利きです。地域で地道に活動している、素晴らしい団体を発掘できるのは地方の助成財団の強みであり、かつ使命です。そういった団体を地方の助成財団がはじめに支援することで、団体の信頼度向上につながります。さらに、団体にとってもよい経験になります。信頼と経験の蓄積が全国規模の助成金の支援につながります。

Q　申請者の視点、審査担当者の視点のギャップは何ですか？

申請する側はどうしても来年度実施する事業に目がいってしまいます。つまり、助成金をいかに使うかということを中心に考えます。一方、助成財団の審査担当者は助成金の使い方はもちろんのこと、助成金が終わった後のことを考えています。助成事業が終了した後に、団体としてどのように事業を展開していくつもりなのか、審査でよく質問されることです。

Q　助成申請の準備に必要なことは何でしょうか？

本当にその事業が、①地域や受益者にとって必要な事業なのか？　②団体のための事業になっていないか？　③成果を出すことができるような事業になっているか？　ということを団体内でしっかり議論することが大事です。

Q　活動と事業の定義がよくわかりません。

厳密な定義はありません。普段みなさんが継続的に行っている取り組みを「活動」だと思ってください。一方で、助成金で求められているのは、普段の活動ではなく「事業」です。一定の期間を設け、目標を設定し、目標を実現するための方法を考え、そのプロセスをまとめたものが事業となります。ふだんの活動から、事業を抜き出したものが申請事業となります。

Q　助成金の付加価値は何ですか？

信頼と経験の蓄積が助成金の付加価値です。助成金をもらって単に事業を行って終わり、というのが助成金の役割でありません。資金援助で事業を実施することで成果を出すこと、さらに事業のプロセスを通じて信頼や経験、ノウハウを蓄積し、今後の事業の発展に活用すること、この2つの助成金の役割を意識していきましょう。

Q　よい情報発信は、なぜ必要ですか？

ここ10年で、様々な情報があふれかえっている世の中になりました。今までは、よいことをしていれば周りが気づいてくれる時代でした。今は、自ら積極的に情報発信をしないと気づいてもらうことができません。情報を届けたい人を想定して、情報を発信していきましょう。

山田さんから 福武教育文化振興財団にエール

福武教育文化振興財団の 30 周年記念誌『andF』の中で、元理事長　福武純子さんは、「良い文化や教育から良い人が育ち、良い人から良い文化や教育が育っていくような好循環が地域振興である」と言われています。この思いから、地域の活動団体と助成財団が一緒になって作り出す取り組みは、岡山の地域にとっても有意義なものです。さらに、他の地域のモデルにもなることを期待しています。

YAMADA Yasuhisa
一般財団法人非営利組織評価センター　業務執行理事
群馬県高崎市出身、慶應義塾大学文学部卒（フランス文学専攻）。1996年日本財団に入会。2009年から公益コミュニティサイト「CANPAN」の担当になり、NPO×情報発信、助成金、IT活用、寄付をテーマに様々なNPO支援の活動に取り組む。2016年4月、（一財）非営利組織評価センター（JCNE）の設立とともに、業務執行理事に就任し、非営利組織の組織評価・認証制度の普及にも取り組んでいる。

「コロナ禍を乗り越えるための緊急助成」は22団体（個人）に決まりました。その中の4団体を紹介します。

おかやま親子応援プロジェクト
代表　石原達也

岡山県内で活動している、子どもや親子支援を行う民間組織（NPO/サークル/企業など）が連携し、子どもや各家庭を「ひとりにしない」ために、オンラインプログラムの提供（対面型の運動や遊び、工作、音楽などの体験学習のプログラム）、学習支援マッチング（学習の遅れに悩んでいる小中学生とアルバイト先を失った大学生のマッチングをし、子どもに合わせた学習支援）、物資の寄付募集（必要な物資を家庭に届ける）に取り組むプロジェクトです。現在29団体が加入。順次、参加組織での対話により拡張しています。

角ひろみ
（劇作家・演出家）

屋内外様々な条件下で上演しやすく、少数の演者で豊かに創作し表現できる道として、うたとおどりの紙芝居「箱劇」を展開していきます。「箱劇」は日本独自文化の紙芝居を用いて、小さくしまって遠くまで持ち運べて、箱から立ち上げて大きくひろがるポータブルな演劇です。子どもからお年寄りまで楽しく文化を享受できるよう、町々に出かけて地域の人々を巻き込みつつ、この小さな演劇を通じた出会いと交流がひろがっていくことを目指しています。文化芸術の新しいカタチを模索していきたいと思います。

認定特定非営利活動法人ポケットサポート
代表理事　三好祐也

医療スタッフからの要望もあり子どもたちが安心してオンライン学習・交流支援に参加できるように、入院中の子どもが安心して参加できるオンライン支援環境づくりに取り組みます。事業紹介・マニュアル動画を制作し、動画は病院へ貸出しているiPadで、いつでも視聴できるように設定し、オンライン支援の利用対象者がいた場合に病棟保育士等から提示いただきます。一人でも多くの子どもたちの笑顔につながるようスピード感を持って動画制作を行い、活用できるように助成事業を進めていきたいと思います。

まほろば庄内ヒューマンライツ研究会
代表　半澤秀行

新型コロナウイルス感染症に関して、感染者本人や家族、医療関係者たちに対する差別的発言を扱った紙芝居を作成し、幼児・児童・生徒だけではなく保護者・家族の人権意識の高揚を図るとともに、庄内小学校が属している高松中学校区の小学校2校にも紙芝居を配付し、活用してもらうようにしました。公民館などの社会教育施設とも連携して地域の方々への人権意識高揚に取り組みます。

FACE

教育、学びを核とした地域づくりのために、できることを

江森真矢子さん
一般社団法人まなびと 代表理事

2015年より3年間、和気町地域おこし協力隊（以下協力隊）として岡山県立和気閑谷高等学校の魅力化に取り組んできた江森真矢子さん。2019年4月、協力隊メンバーと教育や人材育成を通した地域づくりを目的とした一般社団法人まなびとを立ち上げ、協力隊卒業後も和気町に暮らしています。教育についての考え方や協力隊の経験を経て成長したことなどについてお話を伺ってきました。

―これまでのキャリアを教えてください。

江森　もともと学校教育には興味がなくて、就職はメディア志望でした。が、全然決まらなくって、どうしようかと思っていたときに、「新しい教育のあり方を提案していきたいので、うちに来ないか」と学生時代にバイトしていた関係で知り合った日能研という学習塾グループの社長に声をかけていただき、これもご縁かなと思って決めました。教育研究所という部署で、私立の中高一貫校に出かけていっては記事を書いたり、学校の魅力づくりと生徒募集のお手伝いや、PBL（問題解決型学習）のカリキュラム開発と運営をやっていました。

―そして、株式会社リクルートに転職された。

江森　2007年から2015年まで8年間勤めました。リクルートでは、高校の先生向けのキャリア教育と進路指導の専門雑誌『キャリアガイダンス』の編集者でした。自分で立ち上げた企画で、やってよかったなと思っているのは、「教科の中で生きる力をどうやってつけていくか」という教科教育を通じたキャリア教育についての記事や、地域課題解決型キャリア教育という連載企画です。和気閑谷高校では総合的な学習時間の設計などを仕事にしていましたが、今も一番のキモは教科だなと思っています。

―「教育」の面白いところは何ですか。

江森　次の社会を作っていくところですね。私の教育観は、中学高校の経験にものすごく影響されていると思っています。開校2年目の、制服も校則もない学校に入学しました。先生たちがいい授業をしようというので、授業がものすごく楽しかったです。ものの見方と表現を大事にしていて、実技科目以外でも、各教科で本質を掴み取ることや自己表現することを大事にしている学校です。行事をやるのも修学旅行も行き先を決めるのも生徒が決めてみんなで運営していく、生徒の自主性を重んじる学校でした。自分自身がそういう経験をしているので、中学生や高校生でも、任せたらできることがいっぱいあると思っています。先生たちは心配して失敗しないように先手を打ちますが、そうではなくて、やりたいようにできる環境さえ整えてあげれば、いくらでもやっていくのになあと。そういう楽しさを中高生のうちに味わってほしいです。

―協力隊として取り組まれたことは何ですか。

江森　主に取り組んだのは和気閑谷高校が取り組んでいる総合的な探究学習「閑谷學」のカリキュラム開発です。1年生はグループで小さいプログラムをいくつかやりながら探究の基本的なやり方を身に付け、2年生で1年間かけて地域でプロジェクトに取り組み、3年生は個人探究という流れを先生方と一緒に作りました。

―カリキュラムの意図は何ですか。

江森　最後はやはり自立だと、自分の道を自分で切り開くということだなと思っています。閑谷學をやっている中で、私が生徒に言っていたのは、「自分の未来も社会の未来も自分たちの手で作っていくための力を付ける時間だよ」ということです。

私の中ではキャリア教育として閑谷學を位置付けています。キャリア教育は、社会の中で自分らしく活躍していくためには、社会の中にどう自分を位置付けるかを探究し、そのための力をつけることだと思っています。そのためには、社会を知ることも必要です。自分は何が得意なのかとか、自分は何ができるのか、こういうことが好きだなとか、こういうことに課題意識があるなとかいうことに気づくことも。さらにはこういう社会を実現したいとか、こういう暮らしがしたいという意思を育てていくこと、社会の中で自分がどう生きていくかということの種がカリキュラムの中に埋めこまれています。

―3年間の閑谷學を通して学びや気づきはありましたか。

江森　やればやっただけ生徒は伸びるなと実感しました。大人と関わる経験や地域に出ていく経験が生徒を成長させることも目の当たりにしました。同時に、閑谷學だけでできることは小さくて、学校教育全体や日々の暮らしの総体の中で生徒は成長するという、当たり前のことにも気付きました。

―協力隊の経験で、江森さんご自身は何か変わりましたか。

江森　できることがずいぶん広がったと思います。もともと私のやっていた領域は、学校教育の現場がメインで、学習プログラムを作る、メディアの編集と企画、時々研修や調査をやったりという感じでした。協力隊を始めて、社会教育、地域や行政という領域が増えました。できることとしては、自分が実際に教えたり、ワークショップのファシリテーション、組織を動かすみたいなところが広がっていきました。

岡山に生活の場を移すときにイメージしていた働き方が、複数の草鞋を履き、暮らすことと働くことが一体化しているような「現代版百姓」だったのですが、近づいてきています。

―最後に、和気町に暮らしてみていかがですか。

江森　仕事とプライベートの境界があいまいなのが、新鮮でした。町なかで知り合いにしょっちゅう会うことや、自宅とお店が一緒で、アポなしでもそこにいけば会えること、地区の行事やお祭り、プライベート、仕事、地域、活動が、混然一体となっている感じが面白いです。

地域のネットワークなしに閑谷學はできないですし、その渾然一体となった地域のエコシステムの中に、学校教育も入っている状態にしていけたらいいなと思っています。

これからも、教育、学びを核とした地域づくりのために、できることをいろいろしていきたいと思っています。

MAYAKO Emori
東京生まれ。自由の森学園高等学校卒業後、国際基督教大学に入学。卒業後、大手学習塾グループで総合学習・校外学習プログラムの制作・運営等に携わった後、株式会社リクルートへ転職、高校教員向け教育専門誌『キャリアガイダンス』の編集者を経て、2015年4月から岡山県和気町の地域おこし協力隊として、県立和気閑谷高校の総合学習と町の活性化に取り組む。2019年に一般社団法人まなびと設立。フリーランスの編集者兼ライターとして全国の地域・教育に関する事例を取材するほか、研修講師等を務める。

一般社団法人まなびと
https://www.facebook.com/manabito.wake

全文は「財団と人」で